琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

アトリエ琉游舎だより 13号

2017年11月8日発行

琉游舎のホームページ
ができました

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

★アトリエ琉游舎のホームページでは琉游舎の活動・会のお知らせ・報告など、最新情報をアップ。琉游舎だよりのバックナンバーや狂言綺語の転載などのページもあります。皆さんとのコミュニケーションツールにしたいと考えています。ご意見ご感想をお寄せください。
★FacebookやTwitterともリンクしています。合わせてごらんください。
★琉游舎for healingはファミリーであり友達でありパートナーである生きとし生けるもの、かたちあるものもないものも、皆さんにとって大切な方々のご供養と永遠のいのちについてのページです。
★まだ検索エンジンではなかなかヒットしないと思います。ご面倒でも一度上記のアドレスを入力頂き、ブックマークをよろしくお願いいたします。

★第四回詩話会は
11月11日（土）13時半から

★次回読書会は
11月14日（火）13時半から

11.12月映画会スケジュール

11/16 木	13時半	息子（121分）	山田洋次監督、三國連太郎主演。頑固親父が不肖の息子を通じて家族の絆を取り戻していく再生物語を家族と社会をモチーフとして描いた映画。
11/23	勤労感謝の日はお休みです		
11/30 木	13時半	黒水仙（100分）	デボラ・カー主演のイギリス映画。伝道尼僧としてヒマラヤ僻地に赴任した5人の尼僧の自らの信仰に疑問を持ち、悩みながらも伝道に努める愛と葛藤の物語。
12/7 木	13時半	長屋紳士録（72分）	小津安二郎監督。戦後焼け跡に家がポツポツと建ち始めた頃、ひょんなことから一人の少年を育てることになった女性と少年の物語。戦後すぐの焼け野原の東京の景色も必見。
12/14 木	13時半	学校Ⅱ（122分）	山田洋次監督,西田敏行主演。「学校」シリーズの第2作。北海道の養護学校を舞台に新人教師や熱いハートを持った教師と障害を持った生徒たちの成長を見つめていく映画。
12/21 木	13時半	欲望という名の電車（122分）	ヴィヴィアン・リー主演。テネシーウイリアムズの名作戯曲の映画化。欲望という名の電車に乗ったその女はどこへ行くのか。アカデミー賞をはじめ多くの主演女優賞を受賞。

狂言綺語・・・行いは風景となる

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

やっと秋らしい天気が、ここコリーナでも続くようになりました。朝がどんどん遅くなり夜がどんどん早くなっていきます。生き物も自然も冬準備に大忙しの秋です。さて私たち人間は自然が冬支度をしているこの季節に、何をしているのでしょうか？私は明け方の澄んだ月をみながら今朝の冷え込みを感じたり、紅葉の見頃はあとどのくらいだろうかと、色づかないまま枯れ散った落ち葉をさくさくと踏みしめています。夜の虫の鳴き声も風前の灯火、小松菜やキャベツの葉っぱがバッタに食われることもこれからはないだろうな、などと思ったり。

私は人間や動物や草木そしてそれらを支える大地とその上に無限に広がるこの空間、今まさしく自分が生きて観て聞いて味わい触れる感触を「風景」と呼んでみたいと思います。「自然」と呼ぶと「文明の進歩は人が如何にして自然を克服してきたかの歴史だ。」とか「人間は今まで自然を破壊してきた、これからは自然を守らなければいけない」というような人間対自然の二元論的思考がどうしても働いてしまいます。「環境」もしかり。今行われているCOP23はパリ協定をどう進めるか、アメリカの離脱宣言を許していいのかなど、結局「人間にとってどう地球環境をコントロールしていけばよいのか？」ということが論点になってしまいます。だから倫理・哲学・宗教の視点からではなく、科学や経済の視点から環境が議論されることが必然となるのです。前回の繰り返しになりますが「初めにロゴスありき」がもたらす当然の帰結です。

誤解なきよう申し上げますが、私は「初めにロゴスありき」を起源とする世界のとらえ方に対しておかしいではないかと言っているわけではないのです。ただちょっと窮屈だなと感じているだけなのです。「地球環境は何としても守らねばならない」「受動喫煙の根絶は当然だ」「正義は貫徹すべきである」など、例が適当かどうかはともかく「ought to」（～すべきである、～するのが当然だ）という”目的”を示しそれを実現することが善であるという世界の認識方法について、ちょっと窮屈な感じを受けるのです。ところが実際は「自然は私の心の安らぎです」「受動喫煙は私には苦痛です」「あなたの正義は私の正義ではない」というような「is」（～です）という”事実”がわたくしたちひとりひとりにとっては切実なような気がします。「ought to」と「is」の間が離れていればいるほど、その世界は私たちには不自由で窮屈な世界であり、安らぎの処から遠いところのような気がするのです。

「風景」について考えてみます。「はじめに行いありき」これがお釈迦様の教えですと前回書きました。私がコリーナの風景に触れるということは澄んだ月や落ち葉を見、鈴虫や雉の声を聴き、風の冷たさを肌が感じ、渋いか甘いかと柿の実に思い致すことです。最初は耳や目や鼻などの体の器官が働きます。そして器官から心へとその感覚の在り場所が移動していきます。眼で「見」ていたものを私自身のいのち全体で「観」る。耳で「聴」いていたものを今ここにあるありのままの私が「聞」く。体の器官や脳が認識する「自然」や「環境」ではなく、私のこころが永遠のいのちに触れて風景そのものとなる。私はありのままの自分に私でないすべての存在（いのち）の風景をまとい、コリーナの風景のひとつとなり、すべてのいのちと一体化するのです。これが「はじめに行いありき」です。つまり私自身が私以外のすべての存在とともにひとつの風景となるそのために「行い」があるのです。

風景を身にまとい風景そのものとなること。そうなると人は自然をコントロールする存在でもなく、自然に打ち負かされる存在でもなくなり、自然の中に生かされるいのちのひとつとなるのです。その時私は風景の中で生かされている自分に感謝し、自分でないいのちを慈しみ、そのいのちを頂くことに感謝するでしょう。そしてそこがやすらぎのところなのです。

風景をまとうという行いは絵空事でしょうか。風景そのものになれば自然と共生することができる、だから自然を破壊することもなく、仲良く暮らすことができるという楽天家、あるいは自分だけが自然と共生できれば良しとする隠とん者なのでしょうか。軍備を持たなければ他国から侵略されることもなく、いずれ他国も武装を放棄するだろうと考えた、かつての非武装中立の考えにどこか通底しているようにも思えます。しかし今、あえて自分が生きている社会の論理（ロゴス）の対極にある観る（行い）という視点から日常を振り返ってみることも必要だと思っています。こころを非武装中立にするのです。ロゴスに偏ると窮屈、行いに偏ると放埒。
どちらにも偏らない中道の道が見つかればよいのですが。

それではまた次号でお会いしましょう（出琉）

琉游舎：戸井　出琉・恭子
お問い合わせ先：0287-53-7848　08033508152
矢板市大槻2319－17**コリーナ矢板Ｃ－８５０**